

# 地域の山に住む在来種天然イワナの 保全増殖活動

- 在来種天然イワナの自然を守って三十年 -

新潟県水原町 五十嵐 新三

## イワナは訴える

〔水底の有機物は動かなければならない〕

山の落ち葉等の有機物は風雨によって沢に運ばれ下流へと流れます。沢の水は浸透しては地表に出、浸透しては出るという自然浄化作用で濁りは水底で濾され清い水となって流れて行きます。水底に溜まった落ち葉等の有機物は水生昆虫を育てそれがイワナを含む生物の大切な餌となります。しかしその堆積物も時々来る豪雨によって一気に下流へと押し流され海迄届く事になります。川と海の交わる所では山から来たその有機物が鮎の稚魚、川蟹の稚蟹、海の魚の稚魚貝等魚介類を育てるのには無くてはならないものになるのです。

沢には又新しい堆積物が溜まり沢の生物を育てる事になります。昔からあったこの健全な自然循環が現代の河川土木工事によって不健全なものになってしまったのです。

人命財産を守る事を理由に昭和40年頃より急加速した河川改造工事が、川をダム、三面コンクリーで固めてしまいました。だから水底に溜まった有機物は何時迄も流れず腐ってしまうのです。水底の堆積物には適当に酸素が供給されないと水生昆虫を育てる事にはなりません。だから何時までも止まっていず適当に動く事が必要なのです。海でも有効な有機物が流れて来なくなり魚介類が育たなくなったのです。

30年もイワナを育てていると自然とイワナの訴えが聞こえて来るのです。

近くの山のダム湖での話。

昭和41年水害復旧として大きな砂防ダムが出来ました。穴が塞がり水が溜まったのでイワナを放しました。4年目には驚く程の増殖をしたのです。所が5年目にダムの底が抜け魚はすべて流れてしまいました。次に又水が溜まった時イワナを放したのですが、それは前回のような大増殖は見られま



写真1 在来種ニッコウイワナ



写真2 イワナと私

せんでした。ダムが古くなり水底の堆積物が腐るとイワナも増殖しないという事です。

〔鉍毒は未だ迄も続く〕

鉍物質を含んだ山であってもそのままにして置けば鉍毒が流れ出る事はありません。所が一端山を削ると鉍毒は止めども無く流れ出るので。

三川金山付近の沢は閉山して50年経っても尚鉍毒が流れ出ているのです。見た目には真に綺麗な水ですが、何回イワナを放しても出来上がらないのです。イワナはきれいな水安全な水で無ければ育ちません。他にも閉山した山が幾つもあります。その付近の沢は同じように駄目です。綺麗そうな水でもイワナを放した瞬間イワナの動きが可笑しいので毒があるという事がすぐ分かるのです。

〔山を削ってはならない〕

今一般大衆の目の届かない山では大変な事が起きています。

治山治水事業として緩斜面に砂防ダムを造る、それは話も分かります。けれどもやる所が無くなったと言って急斜面を削り工事用車道を造り上流へ上流へとダムを造って行くのはどういう事なのでしょう。公共事業は土建業者に仕事を与える為の事しか考えていないと言わざるを得ないのです。それだけではありません。故郷林道と称して険しい山の中腹を削り林業に関係の無い林道を造っているのです。

それは出来上がっても次の豪雨で崩れ落ち又多大な経費をかけ補修しているのです。沢には泥水が



写真3 林道工事標示板



写真4 標高450メートル地点の砂防ダム

流れ削った岩からは鉍毒が流れ出ています。イワナは水の変化には敏感でそういう所のイワナは全て滅んでしまいました。公共とは人間だけでは無い、イワナを含む生物も公共の中に入る事を考えて貰いたいのです。

土建業者に仕事を与えるのになんで山を壊す事をするのか、平場の生活道路の改良はいくらでもあるではないかと訴えるのです。

〔原生林を伐ってはならない〕

原生林は豊かな水を蓄え治水の役目も果たし、人間を含む全ての生物の生きる源なのです。所がみんなのものであるはずの国有の原生林が次々と伐採され、今は残り少なくなってしまいました。

昭和45年頃は価値の高い杉材の生産地にするという名目でした。30年経った今その杉は立派に育っているのでしょうか、浅草山麓を日倉山麓を見て下さい。原生林地帯は豪雪地です。壮年期になった杉がばたばたとへし折られ見る影もありません。計画は挫折したのです。杉の植林は諦めました。でも貴重な原生林を金に変える為の伐採は進んでいるのです。

昭和20年以前はブナの原生林を伐るにも手鋸と斧でした。その上長年かけて少しづつ伐って行きました。だから伐った後に種が芽吹きブナの再生林が出来上がったのです。その良い例が東蒲鍵取にあります。所が現代はチェンソーを使う為広大な面積を一変に伐ってしまうのです。だから同じ樹種が再生せずくま笹陣竹に占領されてしまうのです、東蒲猪ヶ森山荒倉山を見ればその事がすぐ分かるのです。

止めてくれと真先に叫んでいるのはイワナでした。

〔人工林にはイワナも鳥獣も育たない〕

放流によって蘇った沢を調査してみると、広葉樹の部分にはイワナが多くいるのに杉林部分はイワナが切れているのです。鳥獣も杉林は好みません。

地域の山に住む在来種天然イワナの保全増殖活動 - 在来天然イワナの自然を守って三十年 -  
新潟県水原町 五十嵐 新三



写真5 豪雪でへし折られた植林杉



写真7 源頭放流を終えた原生林伐採に抗議して座り込む同志



写真6 原生林伐採植林標示板

水源を涵養するのも広葉樹、鳥獣魚を育むのも広葉樹、治水の効果あげるのも広葉樹、用材にする人工林は必要最低限に抑え急斜面は広葉樹を保全して貰いたいのです。

〔ゴルフ場の雨水は沢に流してはならない〕

東蒲上川津川ゴルフ場滝沢川の上流土埋山の源頭に昭和58年在来イワナの成魚10尾を放しました。4年後にはイワナがゴルフ場の近く迄増殖したのです。しかし何年経ってもゴルフ場から下流へは増殖して行かないのです。

ゴルフ場で使う農薬は雨水と共に沢へ流れ込みイワナを殺してしまったのです。イワナを殺す毒水は人間にも害があります。ゴルフ場の雨水は沢に

流してはならないのです。

それは津川ゴルフ場だけの事ではありません。三川の阿賀高原ゴルフ場も同じなのです。

農薬と言えば杉の植林にも、杉は枯らさないで他の雑木を枯らす農薬もあるようです。それを使った山のイワナは滅びてしまいました。

それは集落へ流れ込まない沢の上流で行われるので目立たないのです。

#### 在来イワナ保護活動の理念

私の住んでいる新潟県中下越の地域の山にはニッコウイワナが生息しております。

今から35年前の昭和41年42年、連続して1日の雨量500ミリを越す豪雨があり山は土石流となって崩れ落ちました。

川の最上流部の水温の低い部分に住み、多少の出水では力のある成魚が、又異常湧水では稚魚で持ちこたえ生き継ぐ生命力のあるイワナではありませんが、数百年に一度の大災害には勝つ事が出来ず、大部分の沢のイワナは姿を消してしまいました。

翌年からは災害復旧の護岸・砂防の大工事が始まり、落ちたイワナは永久に帰れなくなったのです。ですから5年経った昭和47年でもイワナは山に蘇る様子は無かったのであります。

イワナ数千年の歴史を考えれば、同じような大災害は幾度となく繰り返された筈です。しかしイワナは、災害が治まると落ちた大河川から再び遡上し、山の遡上止め迄は復元し生き継いで来ました。だから今日の天然イワナが存在していると思われるのであります。

河川や沢の構造が自然の状態であればこそ、そのように自然の大災害にも負けず生き継ぐイワナであります。しかし、現代は災害防止の為に河川の構造に人の手が加わり、イワナの自然復元力を奪ってしまったのです。

昭和30年代以前はまだまだ自然の河川構造でありましたが、昭和40年代より全国の河川は一気に人工の手が加えられ、現在は自然の河川は殆ど無



写真8 自分の育てたニッコウイワナが産卵をする、11月7日午後1時



写真9 放流の数が集まる迄イワナは山のイケ스에保管して置く



写真10 険しい山越えをし、ほっとして放流する伊藤、私、松原の同志



写真11 至福の喜びを味わう放流「さあ行きなさいよ」

地域の山に住む在来種天然イワナの保全増殖活動 - 在来天然イワナの自然を守って三十年 -  
新潟県水原町 五十嵐 新三

いというくらいになったのであります。人がイワナという魚の自然環境を奪ってしまったのです。

私たち人間は自然の恵み無くしては生きる事が出来ません。自然があればこそ生きられる人間であります。

ですから自然を利用し自然から物を奪い取るだけでなく、自然に奉仕する義務もあるのだと思われます。

では個人として何が出来るのか、私がやれる事、個人の力でも大きい仕事の出来る事、それは、在来の天然イワナを守るという事、自然復元を不可能にした沢へその土地在来のイワナを移し植えてやるという仕事でした。



写真12 標高1,537メートル守門岳からの源頭放流に向かう同志



写真13 険しい崖を下り漸く放流地点(五十嵐、伊藤)

保護放流の実績

昭和45年より始めた保護放流の仕事、つまり生き延びた沢から成魚を釣り上げて魚の全く居ない沢へ10尾単位で放す事、そうして自分で殖やした沢より又釣り上げて、山の頂上まで担ぎあげ、水のある沢まで下り10尾単位で放す事、それを重ねる事30年その累計は、新潟県北の朝日岳から南の

表1 新潟県中下越130キロ圏内への放流実績

〔年度別放流数〕			〔地域別放流数〕 (2万5千地図別)				
年度	ヶ所	尾数	県北地区 など	天王 出湯	上赤谷 東赤谷	二王子岳 ひるば山	飯豊山 大日岳
45・46	3	12	74ヶ所 1220尾	177ヶ所 2184尾	57ヶ所 848尾	18ヶ所 715尾	9ヶ所 244尾
47・48	9	58					
49・51	5	35					
52・53	67	646					
54・55	97	1087	村松 越後白山	馬下 高石	津川 越後豊川	日出谷 徳沢	
56・57	109	1396	26ヶ所 318尾	97ヶ所 1266尾	99ヶ所 1243尾	35ヶ所 427尾	
58・59	106	1280					
60・61	56	913					
62・63	77	2084					
元・2	103	1714	森町 栃堀	粟ヶ岳 光明山	室谷 駒形山	御神楽岳 むじな森	安座
3・4	17	460	24ヶ所 401尾	36ヶ所 610尾	11ヶ所 195尾	40ヶ所 658尾	6ヶ所 136尾
5・6	15	336					
7・8	10	181					
9・10	34	341					
11・12	29	495					
合計	737ヶ所	11038尾	穴沢 11ヶ所 145尾	守門岳 14ヶ所 360尾			県南地区 など 3ヶ所 68尾

浅草岳迄の130キロ圏内、放流実績は次の表のようになつたのであります。

その裏にはその時その時の協力者があり、理解ある方が私の行為に賛同して善意を提供してくれたのであります。

### 源頭放流

保護放流の最初は沢を詰めて、上流の行ける所迄行って放すということをしておりましたが、増殖させても釣り人に釣られるという事や、下流では数年毎に来る小災害でも流されやすいという事から、保護放流の最善の方法として山の頂上より下って放す、つまり釣り人の入られない所にイワナの種を残しておくという事、又災害被害の少ない最源流部にイワナを生息させて置くという源頭放流を発想したのであります。

それは昭和56年から始まって現在迄、北の朝日連峰伊東岳から、竜門岳、平岩岳、光兔岳、ひるば山、飯豊連峰北股岳、三国岳、御西岳、中の岳、二王子連峰、五頭連峰、菅名岳、日本平山、兎光頭山、木六山、栗ヶ岳、五平小屋、守門岳、むじ

なヶ森山、日尊倉山、白根山、浅草岳、と130キロ圏内の山のやれる所は殆どやり終えたのであります。その実際の一例はビデオにも録画して記録してあります。

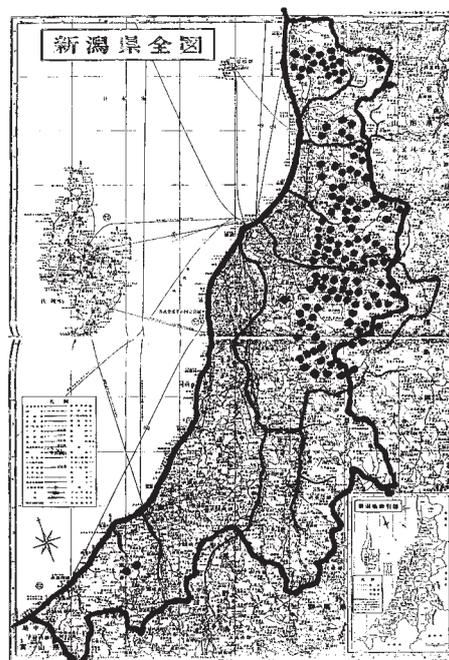


写真16 新潟県中下越地域の源頭放流箇所



写真14 イワナを背に崖を下る



写真15 沢の源頭



写真17 源頭放流追跡調査大きさを計測して放す

地域の山に住む在来種天然イワナの保全増殖活動 - 在来天然イワナの自然を守って三十年 -  
 新潟県水原町 五十嵐 新三

源頭放流追跡調査

昭和63年より平成5年まで、県内水面水産試験場と共同で、魚の生息して居ない沢のイワナ生息最上限に在来イワナ成魚10尾放流をし、その追跡調査を実施致しました。

試験放流4河川のうち3河川のみ釣り人に見つからず手つかずでデータが取れました。

その一部は表のとおりで、増殖距離は1年目が340メートル2年目が640メートル3年目が960メ

ートルでその年迄の増殖の下限はきっぱりと守られ飛び離れて下流へは増殖しないという事でした。

その他、魚の居ない沢へ移したイワナは飛び抜けて成長し、通常源頭で増殖したイワナは最大が28cmというのに、移したのは40cmにもなるのです。それで増殖したイワナが放したイワナかも判別でき、雄ではあるが11年魚も居るという事も分かりました。

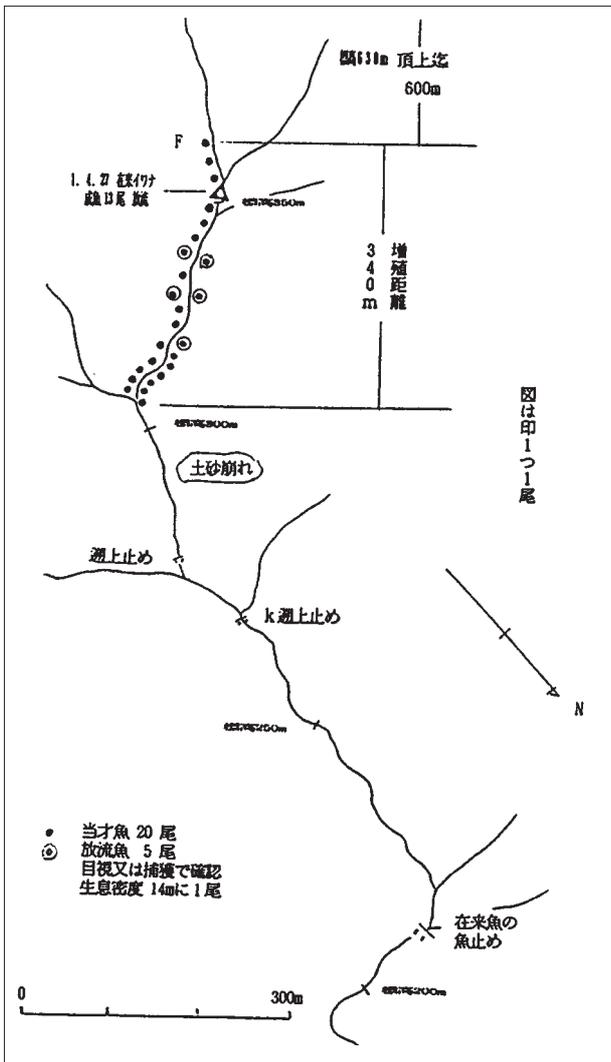


表2 下の沢放流1年目の確認 10 / 18

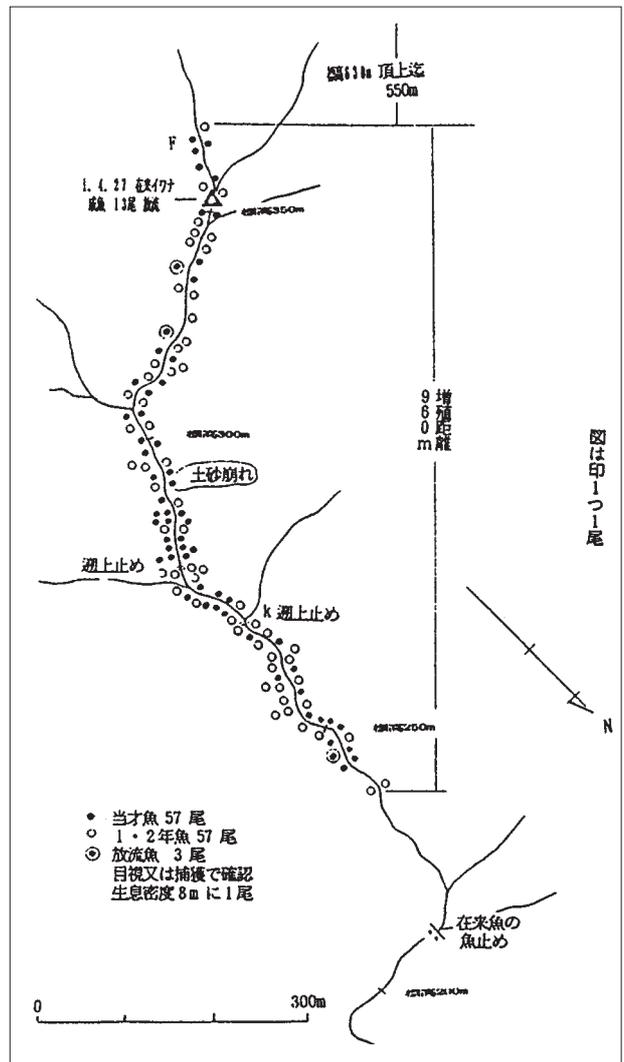


表3 下の沢放流3年目1回目の確認 9 / 27